



座間味島で子どもたちは、洗練されたりゾートの非日常空間ではなく、自然に寄り添う南の島の暮らしを体感しながら、自然・海洋体験をして過ごしました。

8月24日から27日、市誕生10周年記念事業「沖縄自然子ども探検隊」に、応募総数50人から抽選により選ばれた、市内の小学5・6年生24人が参加しました。

参加した子どもたちは、茨城空港から沖縄県に向けて出発。沖縄県では那覇市と那覇市から高速船で約50分のところにある座間味島に滞在しました。座間味島は、今年3月に国立公園に指定された亜熱帯の島々「慶良間諸島」の西半分の島々からなる離島村。初夏の満月の夜にサンゴの一斉産卵が見られる慶良間は、サンゴのふるさとと呼ばれています。また、古座間味ビーチは真っ白なコーラルサンドとどこまでも透명한ブルーの対比が美しく、ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで2つ星に認定されています。

海に恋した夏

〜沖縄自然子ども探検隊〜

第2日目



泊 港から高速船クイーンさままで座間味島へ向け50分の船旅。座間味港に到着すると、座間味村の宮里村長をはじめ多くの方に出迎えていただき、盛大に歓迎されました。宿泊場所の座間味児童生徒交流センターで入村式を行い、村長や観光協会の方に圓城寺歩美さんが「座間味村に来ること、海洋体験できることを楽しみにしていました。2日間お世話になります」とあいさつしました。

午後からは、隊員たちにとって待ちに待った海洋体験（シーカヤック）の時間です。透き通った海を目の前に、隊員たちのテンションはどんどん上がっていました。シーカヤック体験では浜辺から見える無人島に向けて出発。まっすぐ進まず、悪戦苦闘する隊員たちもありましたが、全員無人島に上陸。帰りは、慣れもありスムーズに出発地点まで戻ることができました。戻ってきた女の子は「海が透き通っているの、魚も見えて楽しかった。でも、疲れました」と正直な感想を話してくれました。

8月25日は偶然にも新月。月の光がなくなり、夜空には無数の星たち。運よく天の川も見ることができ、隊員たちは感動していました。



第1日目

茨 城空港に参加者24人が保護者と共に集まりました。出発式では、佐藤宙暉君が「私たち、沖縄自然子ども探検隊は、学校や家庭とは違った環境で生活することで、沖縄の自然や文化について学習します。かすみがうら市内の他の学校の隊員と集団生活を行い、隊員同士、助けあい、励ましあって行動します。目標をもって体験学習、見学に参加し、自分から行動して目標を達成できるよう努力します。私たちは、以上のことを誓い、ただいまから、沖縄県、座間味村へ出発します。」と意気込みを述べました。



茨城空港から家族に見送られる中、那覇空港に向け離陸。那覇空港に到着後、沖縄上空からの景色を見た男子隊員からは、「もう沖縄好きになった」という言葉がありました。バスで首里城公園・守礼の門を見学に出発。バスの中では、バスガイドさんによる沖縄民族楽器三線を使った歌の披露や「ユイユイユイユイマル」の歌詞が覚えやすい琉球民謡「ユイユイ」をみんなで振り付きで歌い盛り上がりしました。



首里城公園では、琉球王国最大の建造物「正殿」など、世界文化遺産を見学。隊員たちは、ガイドさんの説明に聞き入っていました。



見て聞いて感じ
体験から学ぶ!!

事業のねらい

- ▶ 学校や家庭と異なる生活環境で活動することにより、自然や文化などに親しみ、社会的視野を広げる。
- ▶ 集団宿泊学習を通して、異なる学校の児童との仲間づくりを通じて、集団生活のあり方を考える場をつくる。
- ▶ 目的・目標を持つて異なる場所での体験・視察見学などを通して、自らの課題に対する答えを見出すとする探究心を養う。

参加した子どもたちは、4日間をとおして、自然・海洋体験、第2次世界大戦の戦争遺跡巡りなど自然・平和・歴史を学びました。自然・海洋体験では、子どもたちにたくさんの感動を与えてくれました。また、戦争関連の学習では子どもたちの心に響いたものがあつたようです。見て聞いて感じ、体験から学んだ活動レポートを紹介します。



二十数年で、子どもの1日の過ごし方が変わってきたといわれています。なかでも大きく変わったのが「体を動かさない」「人と触れあわない」「話さない」という3つの要素です。この3つの要素が少なくなつたことで、日常の遊びのなかで得られる学びの場がなくなっていると指摘されています。最近はテレビやゲームなど、屋内で遊べるものが充実しているので、家の中においても退屈しません。

その結果、友達と一緒に外で遊ぶことも少なくなり、成長に必要なさまざまな経験が昔に較べて不足しているといわれています。

自然に触れ感動 その経験は財産に!! ～自然体験・海洋体験～

「自分の経験は、どんなに小さくとも百万の他人の経験より値打ちある財産である」これは、ドイツの思想家レーシングの言葉で、「自分自身の経験は、もっとも大事なものである」という意味です。

今回、子どもたち自身が親元を離れ、他校の初めて会う仲間たちとさまざまな体験や経験をした時間は貴重なものとなったことでしょう。子どもたちにとって、遊びや勉強の中で新しい経験や発見をして眼が輝く、喜びを体一杯で表現する、これが重要なことです。事前学習会では不安な表情だった子どもたちも、首里城公園や平和祈念公園などの見学や青い海と白い砂浜での海洋体験では、眼を輝かせイキイキとした表情、そして自信に満ちた表情で活動していました。

つまり、チャレンジする勇氣を持つこと、一歩踏み出すことが重要なのです。今回参加した子どもたちは、勇氣ある子ばかりでしたし、子どもを送り出した保護者も勇氣が必要だったことでしょう。大人は、新しいことに果敢にチャレンジする勇氣を持った子どもたちをたくさん世の中に送り出すことを忘れてはならないことなのです。

今回の事業を通して体験や経験したことは、今後子どもたちの中で生きていき、将来の価値ある財産になることを願っています。

第4日目



最後の一日の第4日目は、歴史を学ぶツアーにバスで出発。バスの中では、バスガイドさんお手製の方言ガイドを使つての沖縄語講座があり、隊員たちも大きな声であいさつなどの練習をしました。

平和祈念公園では、沖縄戦で亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」、戦没者の鎮魂と永遠の平和を祈る「平和祈念像」を見学。暑さの厳しい中でしたが、ガイドさんの説明に耳を傾けていました。



その後、ひめゆりの塔・資料館を見学。資料館では、病院壕を再現したジオラマの前で、生き残りの証言員の方から「当時、教員になりたいなど、夢を持った多くの人が夢を実現できずに戦争で命を落としました。夢のために勉強を頑張っているときに戦争で亡くなったのです。みんなは、夢を実現できるよう勉強などを頑張ってください」と当時のことや子どもたちへの思いを熱心に話してくれました。2箇所の見学をととして、隊員たちも戦争の悲惨さを胸に刻んだことでしょう。

那覇空港から帰路につき、茨城空港で保護者と元氣な姿で3日ぶりの再会を果たしました。



第3日目

古座間味ビーチで海洋体験(シュノーケリング)をしました。古座間味ビーチは天然のビーチで砂もきめ細かく、魚も多くて、サンゴもきれいなビーチでした。

隊員たちはマスク、シュノーケル、フィンを持ちインストラクターの指導に従い海の中へ。マスクが曇ったり、うまく呼吸できない子たちも、見る見るうちに上達しました。



シュノーケリングを体験した隊員たちは「海の中を覗いたら、クマノミや蝶々魚など色とりどりの熱帯魚とサンゴ礁がとても綺麗で感動しました」「シュノーケリングも初めてだったけど、こんな綺麗なものを見たのも初めての体験でした」と興奮しながら話してくれました。また、男子隊員が、「座間味の海を愛しちゃいました」と言っていたのが印象的でした。



午後からは島巡りを行い、イシ展望台や高月山展望台などを散策。高台からのケラマブルーと言われる慶良間諸島の青い海は絶景で、すばらしい景色を堪能しました。

海洋体験を満喫した隊員たちは、座間味村の方々に見送られる中、高速船クイーンさまみで那覇市へ向けて出発。

